

⑫ 公開特許公報 (A) 平1-198984

⑯ Int. Cl.
E 06 B 3/70識別記号
厅内整理番号
C-7806-2E

⑬ 公開 平成1年(1989)8月10日

審査請求 有 発明の数 1 (全4頁)

⑭ 発明の名称 金属製紙貼り障子

⑮ 特 願 昭63-272688

⑯ 出 願 昭59(1984)6月22日

前実用新案出願日援用

⑰ 発明者 袋 俊 男 富山県高岡市早川550番地

⑰ 発明者 浅野 芳 昭 富山県高岡市吉久3丁目5-7

⑯ 出願人 立山アルミニウム工業 富山県高岡市早川550番地
株式会社

⑰ 代理人 弁理士 森 正澄

明細書

1. 発明の名称

金属製紙貼り障子

2. 特許請求の範囲

アルミ押出型材製の組子桟1の一側に溝2を該桟の長手方向に設けるとともに、前記溝に木製の補助桟6を取付け、前記補助桟の表面に障子紙7を貼着したことを特徴とする金属製紙貼り障子。

3. 発明の詳細な説明

(産業上の利用分野)

本発明は、アルミ押出型材製の組子桟を用いてなる金属製の紙貼り障子に関する。

(従来の技術)

金属製障子は、通常、我国において昭和36年頃より一般に用いられ始めて来たアルミサッシ製のものを指称し、現在ではアルミサッシないしサッシとして周知されている。

一方、障子は、一般的な建築の辞典によれば、平安時代に現われた障屏具の総称とされている一方で、金属製建具の枠を除いた可動部分ともされ

ており、また、嵌殺しの場合も、ガラスなどを嵌めた部分が枠から取外せるとときは障子という、とされて、広い意味合いで用いられている。

そして、アルミサッシ製の金属製障子は、ガラスを嵌め込んだ所謂ガラス障子として用いられて來ており、これを紙貼り障子として用いることは、その金属製桟体のため、でんぶん糊等を筆頭とする通常の紙貼り用接着剤では十分な貼着がなされ得ず、結局、紙貼りは不適当であるとして今日に至っている。

(発明が解決しようとする課題)

これだけ普及しているサッシ障子に、紙貼り障子としての役割を与えようとする研究も一方でなされており、この点は、とりわけ使用接着剤の開発の方面からなされている。

しかし、紙貼り障子は、「障子貼る」という俳句の季語に象徴されるように、通常は障子紙の貼り替えを行うものである点に鑑みた場合、強力な接着剤では、障子紙の貼り替えが困難となる不具合を有している。他方、貼り替えが行える接着剤

は、例えば実公昭48-32222号公報に開示されているように、一般に水溶性樹脂ないしエマルジョン樹脂からなるものであるところ、これをサッシ障子に用いる場合は、サッシが結露を生じるので、特に冬期に障子紙の剥離現象を多く生じることとなる。また、この種の接着剤は、通常の紙貼り用接着剤に比べ、すこぶる高価であるという不都合もある。

本発明は、上記事情に鑑みてなされたもので、金属製障子でありながら、安価な通常の紙貼り用接着剤によって障子紙の貼着を行うことのできる金属製紙貼り障子を提供するものである。

(課題を解決するための手段)

すなわち、本発明は、アルミ押出型材製の組子棟の一側に溝を該棟の長手方向に設けるとともに、前記溝に木製の補助棟を取付け、前記補助棟の表面に障子紙を貼着した金属製紙貼り障子にある。

(作用効果)

上記構成からなる本発明において、障子紙は、

木製の補助棟に貼着し、金属製の組子棟には直接貼着しないから、使用接着剤は木と障子紙間用の接着剤、すなわち、従来の木製紙貼り障子に用いられている安価なものを使用することが可能となる。

とりわけ冬期において、組子棟に結露を生じても、その結露水は、多孔質(木製)である補助棟に吸収されるから、障子紙の剥離(接着剤層は一般に水によって破壊される)現象を可及的に阻止できる。

また、組子棟の各溝は、その断面形状を同一とすることが好ましい。溝の断面形状を各棟において同一とした場合は、該溝に取付ける補助棟も同一形状のものが用いられ、これにより部材の規格化がなされ得て、部品管理がしやすくなる。

このように、本発明の金属製紙貼り障子によれば、アルミ押出型材製の組子棟を用いることにより、障子の剛性を高めることができるとともに、組子棟に吸水性の侵れた木製の補助棟を取付け、これにより組子棟に障子紙を間接的に貼着できる

構造となり、直接貼着することに起因する障子紙の剥離現象を回避することが可能となった。

(実施例)

以下に本発明を図示の実施例に基いて説明する。

第1図ないし第6図において、本発明の紙貼り障子は、縦横棟を井桁状に組込んで組子11を形成するとともに、この組子11を組子枠8に装着し、これに障子紙7を貼着して構成される。この縦横棟を構成する組子棟1は、アルミ押出型材製であって、該組子棟1の一側に、棟の長手方向と平行に溝2を設けるとともに、該溝の上端に内向き突縁3、3を形成している。溝2は、内向き突縁3、3に嵌まれた最小開口巾bと、これよりも下部に開口深さhを備えた溝部とを有する。この溝2は、その下部において組子棟1のビスホール4に連通形成されている。

かような構造を備えた組子棟において、縦横棟は横棟より縦棟の表裏面間寸法が大きく形成され、縦横棟を構成する組子棟1、1は切込溝5に

て交差状態に嵌合している。この縦棟の切欠溝5に横棟を嵌合した際、縦横棟の表面が一致するよう形成されている。

横棟の表側にも切欠溝5を設け、この切欠溝5は縦棟の溝2の開口深さhと最小開口巾bに一致するように形成され、縦棟の溝2と連通するよう切欠き形成されている。

6、6は、縦横棟の溝2、2に嵌合して固着される木製の補助棟で、実施例では第3図に示すように、1本の補助棟6を、縦棟の溝2に嵌合することにより、縦棟切込溝5に嵌合する横棟の切欠溝5に挿通し、これにより縦横棟の交差部を係止連結している。また、補助棟6、6を縦棟と横棟に嵌合した際、その表面が両棟の表面と一致するよう形成している。そして、組子棟1の突縁3の表面と、補助棟6、6の表面に、実施例の場合、糊10を塗布して障子紙7が貼着される。このようにして障子紙7を貼り付ければ、補助棟6、6の表面に塗布した糊10は補助棟6、6と障子紙7に程良く浸透するため、補助棟6、6と

障子紙7の貼着は非常に強固になされる。

このように、組子桟1はその溝2に障子紙貼着用の補助桟6を嵌合し、しかも実施例の場合、該溝の上端に形成した突縁3、3で該補助桟の離脱を阻止しているので、これにより金属製障子に障子紙を容易に貼着しあつその剥離を防止し得ることとなる。なお、組子桟1を井桁状に組込んだ組子1-1は、組子枠8から押通するビスを組子桟1のビスホール4に螺合して、障子の枠組形成がなされる。

一方、補助桟6に木製のものを使用するので、破損や劣化でこれを交換する場合を生じる。実施例において、組子桟1のビスホール4と前記溝2とを連通形成しているので、かような場合にビスホール4に細棒を挿入して、ビスホール側から補助桟6を適宜取外すことができる。

4. 図面の簡単な説明

第1図は本発明に用いる金属製組子桟を示す図で、(1)は縦桟の断面図、(2)は横桟の断面図、第2図は金属製組子桟を用いた金属製障子を示す正面

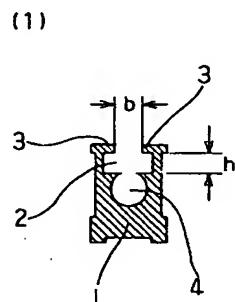
図、第3図は組子枠成材の分解斜視図、第4図は縦横桟の交差部を示す拡大正面図、第5図は第4図のA-A断面図、第6図は第4図のB-B断面図である。

1…組子桟	2…溝
3…突縁	4…ビスホール
6…補助桟	7…障子紙

特許出願人 立山アルミニウム工業株式会社

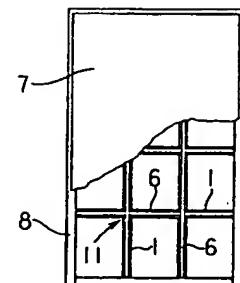
代理人 弁理士 森 正澄

第1図

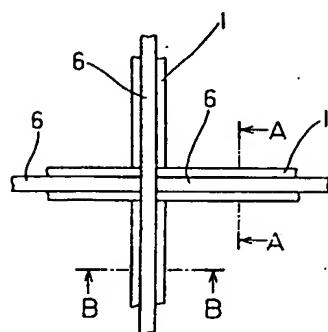


1…組子桟
2…溝
3…突縁
4…ビスホール

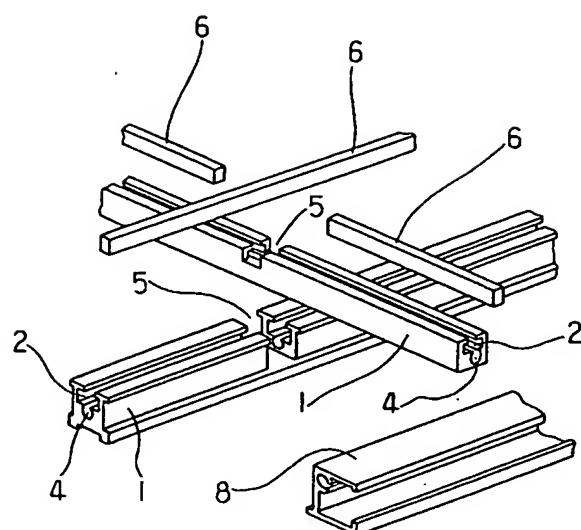
第2図



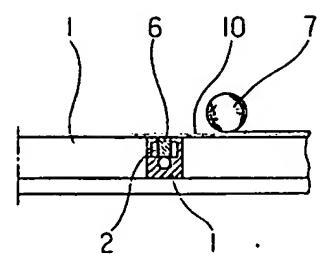
第4図



第 3 図



第 5 図



第 6 図

